

大正から昭和にかけ、現代日本人の日常生活の礎となる道路整備と住宅設計という2つの分野で、かつてない方法論を提示した2人の技術者がいる。アスファルト舗装の原点となるワービット工法、調理場と食事場を一体化したダイニングキッチンという新発想。現在の暮らし方の「常識」を生み出した、その足跡に触れる。

# 偉人伝

the life of a great person

土木  
建築

VOL.16

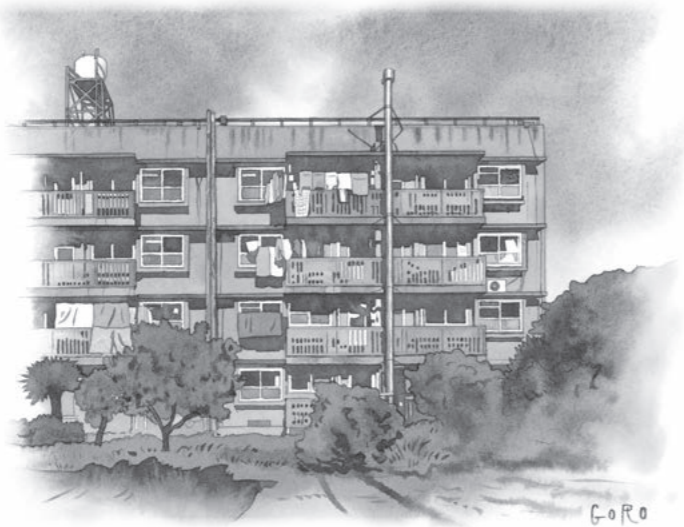
建築

「一九一六年～二〇〇三年」

## 吉武 泰水

Yasumi Yoshitake

日本人の生活様式を  
徹底検証して生まれた  
2DK仕様の原型



吉武泰水は、戦後日本の公共建築物の設計に「計画」という概念を植え付けた建築家だ。いわゆる建築計画学の創始者として建築史にその名を刻む。その最大の功績は「公営住宅標準設計51C型」の提唱と普及である。

1950年代、戦後日本は慢性的な住宅不足の最中にあり、耐火性に優れ、かつ狭隘なスペースでも多人数が生活できる高層住宅の建設が喫緊の課題となっていた。短期間での住宅の量産を可能とするため、必要とされたのが標準的な仕様の開発だ。東京大学に助教授として籍を置く吉武が提唱したのは「食寝分離」と「就寝分離」というふたつのコンセプトに基づく「51C型」だった。現在の「2DK」の原型ともいえる日本初の集合住宅のプロトタイプである。吉武は、家族の食事の状況や、親子それぞれの就寝のスタイルなど、建物の「使われ方調査」を徹底的に行い、居住者の動作を科学的に検証、数学的な理論に落とし込んだ。その結果から導き出されたのが51C型だ。台所と食事をする空間をダイニングキッチン（DK）として重合わせ、親と子それぞれの居寝室の独立性を確保した51C型は、きわめて合理的な標準設計として急速に普及し、日本人の新たな生活空間仕様として定着した。居住者の現実的な生活様式を、建築物の設計理念の根幹に位置付けた画期的なエポックとなった。

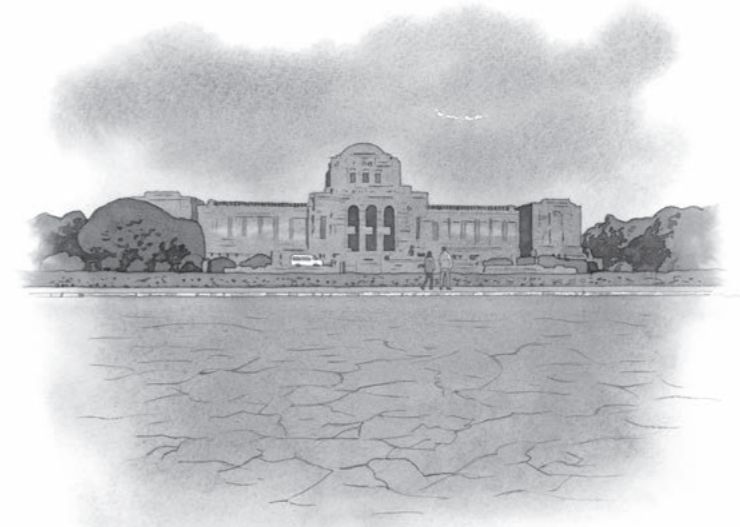
土木

「一八八九年～一九六三年」

## 藤井 真透

Masaki Fujii

日本の道路舗装の  
黎明を告げた  
神宮外苑整備



春は萌える新緑、秋には鮮やかな黄金色に輝く木々に覆われる表参道、神宮内外苑周辺は、大正期に整備された人工林である。明治天皇を顕彰する国家事業として計画されたこの整備事業の中枢にいたのが道路整備の父ともいえる藤井真透だ。

藤井は1914年、東京帝国大学で土木工学を修めた後、大阪府に入庁。その2年後には明治神宮造営局に転任し、技士として頭角を現した。聖徳記念絵画館を中心に放射状に延びる道路によって構成される神宮外苑は1925年に完成したが、戦後の再整備によって姿を消し、造営当初に形作られた都会のオアシスの面影を残すのは現在、絵画館前通りのイチョウ並木のみだ。藤井はこの道路舗装にあたり日本初となるワービット工法を採用している。下層に粗流土のアスファルトコンクリート、上層にモルタルを敷き、上下層を同時に転圧して仕上げるといふ工法だ。設計にあたっては景観に配慮して排水管、電線、ガス管をすべて地下に埋設し、歩車道も分離した。わが国の道路のアスファルト舗装はここから始まったといっても過言ではない。わが国最古級のアスファルト道路とその付帯設備が一世近くわたって機能し続けたことも驚嘆に値する。その後、藤井は土木試験所所長、東大講師などを歴任し、道路工学や都市計画など幅広い分野で後進の育成にも尽力した。聖徳記念絵画館前通りは、東京を代表する道路景観とこのワービット工法によって土木学会の推奨土木遺産に選定されている。